

桂宮家の明治維新

「桂宮日記」抜粋Ⅰ 明治三年～四年

▽『桂宮実録』より引用

▼百瀬ちどりの解説

▽明治三年十二月十七日

從宮内省使來、状如左 承知旨感之

御用之儀有之候間、唯今早々出頭可有之候也

庚午十二月十七日

宮内省

桂宮家令へ

依招 令代扶生島經代 同省へ参入 澤宮内大丞 出会

今般祿制被改候ニ付、御家祿之判物并ニ御改正之規則案紙等被相渡、猶披露之上御礼之儀者同省江可申出旨被達、帰殿之上早々奥向へ及披露并ニ殿中へ御布告ニ相成畢、御書附之写都而挙於左

料紙大高

一品淑子内親王

現米千拾五石

右為家祿永世下賜候事

明治三年庚午十一月

▼明治四年正月十日

於鷹之間家令 從五位宇田淵着座

右政官々御沙汰之趣書之處委し 伝達 如左祿制高下之御請

生島雅喬

料紙奉書切紙

京都府貫屬士族被 仰付為家祿、現米式拾壹石六斗下賜候事

庚午十二月

太政官

以下料紙同上同文 尾崎正康

(以下三四名略)

料紙奉ミノ紙帳

御請書

一 現米式拾壹石六斗 生島雅喬 ㊦

(以下三五名略)

京都府貫屬士族被 仰付為家祿頭書之通下賜候事

右申渡各難有御請申上候依、此段申上候也

辛未正月

桂宮家令

從五位宇田淵

辯官御中

▽明治四年正月廿日

太政官を御沙汰之趣 宮内省ニ而家令承、直ニ奥向へ言上 如左

桂宮

城州葛野郡下桂村別荘地別紙坪数之通更ニ下賜候事

辛未正月 太政官

別紙

城州葛野郡下桂村別荘地

東西 百三拾八間半

南北 百貳拾間半

坪数 壹萬千八百拾六坪余

▼明治四年

二月廿日庚辰天晴、参使平岩正人熊本藩邸

当宮旧領城州乙訓郡開田村長岡天満宮境内ニ有之候長岡明神社之儀ハ、往古之御由緒ヲ以当宮より御勸請御造営相成候処、今般所領上地 仰出候ニ付、右神社当宮御邸内江可被引移之处、御由緒之次第も有之候、旁以其御藩邸江御預ケ被成度思召候事

辛未二月

▼明治四年

二月廿二日壬午天晴、京都府江被差出御届書如左

(端裏)「用紙奉書四ツ折美濃控添」

当宮旧領城州乙訓郡開田村長岡天満宮境内ニ有之候長岡明神社之儀者、往古深キ由緒有之ニ、以先年当宮より勸請社頭造営ニ相成候処、今般御改正ニ付所領総而上地被仰付候、就而者右社当宮邸江可引移筈ニ候処、由緒之次第も有之、且便宜ニ付、旁以近日之内右社并ニ由緒有之候建物壹ヶ所共、当地熊本藩邸内江引移申候、御府管轄申之儀ニ付、此段御届申上候、以上

明治四辛未年二月廿二日

桂宮家令

従五位 宇田淵

京都府

御中

▼明治四年二月

二十三日癸未天晴、参上熊本藩中嶋彦藏より御請書差出、如左

其 御所御旧領城州乙訓郡開田村長岡天満宮境内ニ往古御由緒ヲ以長岡明神御勸請ニ相成居候処、今般御所領御上地被 仰出候付、右長岡明神社当御所内江御引移可被為在処、当藩之儀者御由緒之次第も有之、旁以当藩邸江御預被為在度段、御使を以委細被仰下候趣奉敬承、早速藩元江申遣知事奉承知候上御請可申上筈之処、御旧(衍)御旧領之儀当月中御上地ニ相成候付而者、右神社御引移有無之儀被仰立之筋茂被為在候由之処、右之通遠路藩元江道通儀往反日数を経候而者不都合之御模様ニ付、此

節之儀者御当地詰合限申談を以御請申上候、依之於邸内御社床等之儀、夫々相嘗言上可仕候間、其上
ニて御遷座之御都合被為在度御儀与奉存候事

辛未二月

▼明治四年

二月二十五日乙酉天晴、長岡天満宮御代参、中小路奥之助奉仕之、当年より御改御札壹受之

御初穂 金百疋 表より

同 金百疋 奥向より

右当年より二月壹ケ度ニ御代参可勤、且御初穂共当月御備、九月御神事之節被登(麿)止、是迄例年天満
宮御札、禁中其外御所々々江被進等相成候処、是又從此度被相止、奥向御札差上而已之事

但今日御代参、桂詰より可相勤旨、兼日申達置

▼明治四年

二月二十六日丙戌天陰、熊本藩留守居中島彦藏より長岡明神并御茶屋向等移転之儀、政府江御届済之旨、
以書中申来、則届書之下案相添差出如左

桂御所御旧領城州乙訓郡開田村長岡天満宮境内ニ有之候長岡明神社之儀者、往古深御由緒有之、先年
桂御所より御勸請社頭御造営相成候処、今般御改正ニ付御所領総而御上地被 仰出候由、就而者右明
神社桂御所江御引移可被成在処、当藩江者由緒之次第茂有之、殊ニ御使宜ニ付旁以当藩邸内江御預ケ
被為在度段、御使ヲ以御懸合之趣有之、御請申上候ニ付、近日之内御引移之筈ニ御座候、且亦右明神
社江由緒有之候建物一箇所、右之節引移候筈ニ御座候、此段御届申上候、以上

辛未二月二十四日 熊本藩大属中島元寿

京都府

御役所

▼明治四年

四月五日甲子天晴、参使塚田守馬麻上下着、熊本藩邸、別紙之通令申述

今般長岡明神社其御藩邸江御遷座ニ付

御初穂米 一石

御印台灯燈 一對

右御奉納ニ相成候事

辛未四月五日

桂宮家従

塚田守馬

(頭書)「外ニ金五百疋奥之沙汰ヲ以御奉納」

▼明治四年

八月廿日(中略)

参使中小路奥之助 熊本藩邸

金二百疋 長岡明神社御祭日二付被備之

御代参相勤、京都詰石崎清太郎式会云々

▽明治四年五月廿七日

大蔵省出納司江被差出書面如左

証

現米五百七石五斗

右者当官家祿之内、当末年春夏兩度之分、請取申処如件

辛未五月 桂宮家令

宇田淵[㊦]

大蔵省

出納司御中

▼明治四年

十月十五日壬申天陰

御榊神供 雅番奉仕之

熊本県邸江朝倉信夫令参入、長岡社之儀二付過日邸長より申出之処、当邸内江御勸請可引移御治定二付、此旨財津武江面会及打合置、日限之儀ハ追而可申入筈也

▼明治四年

十月十八日乙亥天晴、長岡明神社今日遷座也、熊本藩邸江渋谷清見令参入 遷座式、祝詞奉仕之金百疋、為勞儀賜之

二十日丁丑、京都府江被差出届書如左

長岡社引移之儀二付御届書

当官旧領城州乙訓郡開田村長岡天満宮境内ニ有之候長岡明神社之儀、当地熊本藩邸内へ引移シ候ニ付、去二月委曲書取ヲ以御届申上置候処、今度右邸取払ニ付、更ニ当官邸内江引移申候、仍而御届申上候、以上

辛未十月

桂宮家令
從五位 宇田淵

京都府

御中

廿二日己卯天晴、長岡明神社正遷宮也、御榊社内於坤方造宮鎮座云々

神供 鏡 一重

神酒 一基

右正遷宮式祝詞渋谷清見奉仕之、終而金百疋賜之

▼明治四年

十一月十六日壬寅天晴、

(中略)

京都府検地掛を申来、如左

長岡天満宮社地建物等其 官より御返献ニ相成候哉、如何御尋申入候、右之通ニ候ハ、今一応其節之書類一ト通り相差出在之度存候、仍而此段及御懸合候也

十一月十六日 京都府

検地掛

桂宮

御家従御中

▼明治四年

十二月三日

京都府より申来、如左

先達而其官より返献相成候長岡天満宮社地建物等、為請取明四日第十二字(ママ)官員老人差出候間、為引渡同所江御家従老人同刻出頭有之候様致度、此段御達申置候也

十二月三日 京都府

桂宮

家来中

▼明治四年十二月四日

今曉より家従朝倉信夫長岡表江罷越候旨申御届

但前儀為引渡令出張云々、府方出張人者吉田賀三郎

▼十二月五日

朝倉信夫長岡より今朝帰京、昨日之次第申御届

京都府土木掛吉田賀三郎、長岡表江昨日遣請取出張、依而御社物其外所々社地建物図面引合セ、箇所々々引渡相済之旨申出、且右ニ付石原・中小路兩人等、今日限御社奉仕被免之段御沙汰之旨申達置候儀等御届

尤村役江右旨相心得之段申達之事

▼明治四年

十二月廿二日戊丑天晴、中小路奥之助桂別業より交代、昨夜帰宅之旨申御届

長岡天満宮附神用品々并其外常用共

左之点数政府江引渡分、書取ヲ以差出之、但

靈元院宸翰 天満宮額 神前掛之 一面 堅耆尺三寸 巾八寸

神鏡 同所在之 一面 臺共

神供机	同所在之	大小三脚
鈴	拝所掛之	二
三十六歌仙色紙張額	拝殿掛之	八面
年中行事掛板	連歌所在之	一面
易経詩経書経	廿七冊	
十八史略	七冊	
古事記	三冊	
日本書記	十五冊	
右二箱入		
神号印板	二面	
同守用	石印 壺	印板 壺 一組
宸翰 牛王宝印板	一面	
長岡社印板	壺	
神酒德利 錫	三対	
神供小唐櫃	壺	
金灯籠	大 四	
金灯籠	小 三十九	
高杯	三	
三方	大 四膳 小五膳	
神楽用大鞆	壺	
同 調拍子	壺	
同 白木机	三脚	
鉾	二本 杵二共	
杵入太鞆	壺	
朱傘	一本	
弓矢	一組	
湯釜 唐金	壺	
鉄竈	壺	
搗臼	壺	
井籠	一組	
榊神供形箱	一組	
同神供入曲物 三入子	一組	
遷座仮宮	一組	
常用鍋釜	五	
同 箱火鉢	三	

(境外末社二社、白太夫社・泉殿社の図略)